

内視鏡室で胃壁の止血処置を受けたのち、ベッドごと運ばれてゆく経路に見覚えがあり、三年前の即日入院時と全く同じである。後で頂いた入院診療計画書のコピーに、「胃潰瘍からの吐血。約2週間の観察を要す」とあった医師の発言もほぼ同じだった。

幅広い搬送用エレベーターから押されて出た所は西外科病棟の四階で、交代勤務引き継ぎ中のコンパクトなナース・ステーション内にも見覚えがある。西病棟を貫く、長い真っ直ぐな廊下の彼方に外光がポツリと点って見え、何か懐かしい感じの奥行きだ。

廊下沿いに続くドアが視界後方へ去りつつ、病室番号も…413～410と減ってゆく。一瞬停まったベッドは枕頭側からぐらりと408号室に曲がり入った。かれこれ午後四時半を回った頃だろう。胸ポケットに腕時計がある筈だが、吐血ショックにつづく自眩で文字盤を見る気もしない。絶食（禁飲食）のまま、此の入院初日は就寝。手帳に日記をつける気力がもどったのは翌朝である。まだ薄明の六時過ぎ、足音を忍ばせ入って来たナースの行なう採血で、腕を出てゆく体液が赤色に見えて、昨朝の吐血いらい初めて目の焦点が定まった。

一日分blankだった手帳に先ず、「この部屋は全員が自力歩行も可」と書く。次いで、408号室は通常の六人部屋と記し、「うち二人は、点滴柱を押し、夜中に何回も小水に通う。又、入り口右側の男は中々元気。単身で歩き回る」ともある。僕が真っ先にこう書き出した訳は、たぶん前回入院時は、同室者の半数が自力歩行できなかったのを、強く心に印象づけられていた為だろう。

医師の指示で禁飲食の最中だから、次にむろん食物のことが記してある。

『タベの給食はクリスマス・イブ風だったらしい。今朝、患者四人（若列奥の人も禁食中）は、きのうの夕食の膳にケーキと照り焼きチキンが付いた一件を、訪室中のナースに子供じみた喜びで喋っている。そんな患者の気持ちを逸らさない別府ナースだ』

こう書いた時の病室内のやりとりを、今でもよく覚えている。

朝六時半、定例の巡回訪室にやって来たのは別府ナースだ。素焼きの博多人形によくある柔和な女児の相貌に、おっとりした下がり眉とパッチリ張った黒目を持つこのベテランナースはのびのびと笑い、入院患者の提供したがる狭い話題に対してもフンフンとうなずき手際よく返答しつつ手早く皆のバイタル（体調）データを採って回る。

昨日一日の便通と小水の回数を、各一人一人に尋ねながら彼女はこう応じる。

「フフフ、そう？病院の食事で、そんな良いものが出たの。じゃア、よかったね。クリスマス特食なら、あたしも食べてみたかったな。チキンの照り焼きなんて久しくお目にかかってないもん。そうだ、お正月にはもっと良いものが出るってわけ」

「俺は、居るかな？」と誰かが言った。

入院した此のまま正月入りかという素朴な疑問で、不貞腐れ声ではない。

別の男が羨ましそうに、「別府さん、お正月くらいは看護婦さんもゆっくり休みがとれるんだらう？」と聞く。

「ううん、病院に患者さんが居るもん。皆が短くポツポツって取るだけよ、交替でサ」

年末年始の休暇取得の実際を、別府ナースは簡単な一言でそう答えた。

「だったら、大晦日もやっぱり勤めになるのかい、お宅さんも？」と別の人から。

「わたしは…ええっと」彼女は指を折って日数か何か数えて、「大晦日は、たぶん二直目かしら。今年は、除夜の鐘をどこで聞くんだろうね、ハハハッ」

今の答えは、自らナース稼業の浮草ぶりを笑い飛ばす感じだった。

如何にもベテランナースに時々いるタイプで、ものに動じない度胸が窺われる。これが若いナースだと矢鱈真剣に答えようとするので、お互いに気が疲れるものだ。

「なーんだ、別府さんも大晦日に居るんだ。第二直じゃ、夜遅くまでだな」とひと安心声。

「だったら病院にこのまま入って居ても、きっと寂しくはないな。ああ、此れじゃあ俺、年末がどうなることかと思って心配していたんだ」

「そうよ、みんなで楽しく病室で年越しをしなくちゃ」と、接する患者が少しでもしんみりするのを嫌う別府ナースは笑み、おだやかに言う。

彼女の年齢は、たぶん三十五過ぎだ。患者との手慣れた話しぶりや、素早くて無駄を感じさせない動きは、同輩中でも既にベテランの域かと思われる。でもこの別府ナースを、三年前の入院時に、この外科棟では一度も見かけた覚えがない。もしかして子育てが一段落ついて、二匹狼であるナース稼業に可能な再就職組の口か、又は院内の人事異動かも知れない。看護現場の第一線が、いつも人手不足で不安定とはよく耳にすることだ。

きのう入院以来、人の出入りをベッドから眺めているが、前回見覚えのあるナースが意外にも少ない。三交替制勤務の職場は、働く人の入れ替わりが激しいのだろうか。

医師の指示で僕は、ベッド上以外は一步も自由が利かず、トイレ行も不可、目新しい刺激は点滴交換のみ。不自由な暇を持て余し、病室に現れるナースを眺めるのだけが楽しみだ。すでに前回三年前の入院体験を思い起こし、当時の記憶とくらべ始めている。

電子体温計を別府ナースへ戻したとき、

「加藤さんは、まだ此処にいらっしゃいますか？」

と、試しに尋ねてみる。三年前だったら知っているだろう。

「カトウさん？」と別府ナースが目を上げた。「ああ、身体のととても大きかった人のことネ。へえ、加藤さんが勤めて居たのを知っているの。学校関係か何かのお知り合い？」

彼女は改めて僕を見おろした。患者は一般に個人としての印象が薄いからだ。

僕は答えた。「三年前、ここで十日ばかりいろいろお世話になりました」

「あら、じゃ入院は二度目？」と僕の枕頭に掛けてある百札で入院日などを確認し、その手のメモ用紙に体温データを記入しながら別府ナースは、「ここは、二度も来なくたっていい場所なのに。でも、病院が恋しくなって、また来ちゃったわけだ」

と言うや、自身の軽口にあっけらかんとケタケタ笑った。それぞれの性格にもよるだろうけど印象ではナースって、人一倍独りで笑うものだ。

「加藤さんかア」と別府ナースは思い出し顔をしたが、「あの人は、とっくに辞めちゃったわヨ。だって三年前でも、もうかなりの歳だったでしょう？」

職業柄だろうか凄くドライな言い方をする。今の意味は、加藤さんの体力が弱って、この稼業はきついから自然退職した訳よ、と受け取れた。同僚への見方のクールさが意外だが、でも他意は全く感じられない。長年戦ってきた女戦士が最後はハッピー・リタイアメントを迎えたのよ、それで好いじゃない、という語感があった。

「うん、そういや加藤さん、眉毛が真っ白だった」と僕も思い出す。「髪を黒く染めていた。

でも、点滴を入れるのが物凄く上手い人で、そうだ、その時にね、若い医者が点滴を入れるのをお手上げする、ちっとも物を食べない患者がいた。そのお爺さんが夜中に苦しみ出して腕の点滴から血が逆流した。で、当番の加藤さんが夜勤のドクターを呼ぶかと思ったら、てんで医者なんかお呼びじゃない。患者へのしかかって真夜中に、指へ点滴を刺し直すのを見た。痛がるお爺さんを黙らせてね。なにせ痩せ過ぎで腕からじゃ点滴を入れようがなかった。でも、お爺さんはその晩、命の瀬戸際で助かった。前の時、病室が一緒だったよ」

「へえ、その時の夜勤が加藤さんで良かったこと」と別府ナースは微笑む。「じゃ退院したんだね、同室だったそのお爺さんも？」

僕は首を横に振る。「一カ月後にこの病院で亡くなった。後で人に聞いた」

別府ナースは僕の血圧値を読み取っているところだが、一瞬眉をひそめた。

でも、彼女は笑った。「ホント、加藤さん、何処にでも針を入れちゃう人だったネ」

別府ナースは、呆れて居るような、又は人をからかうような口調を崩さない。

「で、どしたの？また入院したら加藤さんが懐かしくなっちゃったン？もし寂しかったら今度はあたしが点滴を、指でも肩へでも入れ直してあげようか。どう？」

ベテランナースにも幾つかタイプがあるようだ。この別府さんなどは患者からも冗談口が利きやすい笑顔のクール派だ。でも後日よく分かったが、患者の移らねばならなかった元の病院名を彼女がしっかり覚えているのは、やはりプロだ。素知らぬ顔をして居るが入院患者のプライバシーについて、^{ばか}芳端の事情を飲み込んだ上で、黙っているのだ。

なぜナース業を選んだのか、人それぞれに思いやその訳は違いうだろうが、一日三交替フル稼働で病院中を走り回っているナースの行状を、ベッドからあれこれ見渡していると、何かしら女性らしく我慢強い、運命的な人生の縮図が現れている気がしてくる。

さて、入院して五日目、恒例の点滴開始となる午前九時過ぎのこと。僕にはまだ一日四本の点滴ノルマがあって、毎朝、針の刺し場所を変えてもらっている。

「ふーむ、血管が見えてきませんね？失礼して、ちょっと良いですか」

舌っ足らずの独り言で見入る若い一ノ瀬ナースが、僕に拳を軽く握らせ、その右腕をそっと取り、肘先を立ててぐるりと眺め直してから腕を再び裏向きにする。

彼女に言われる通りに親指を中に折って握り拳をつくり、更にはもっときつく握ってみるのだが、圧迫用ゴム管を上腕部に巻かれても、殆ど静脈が浮かない。

僕の腕は、皮下組織が青く腫れてしまう質で、前回と近い箇所には点滴針が刺せない。

「そういう体質なんだ、だから針を刺し直すのは何処でも良いです。刺すと凄く痛いらしい手の甲でも、肘の付け根でも構わない」

僕から何度かそう言ってやるのだが、一ノ瀬ナースは、これから一日中続く点滴をベッドで過ごしやすい箇所に入れようと集中した真剣な目付きで探してくれている。

「一昨日やってもらったのは、腕が痺れずにとっても楽だった。点滴が上手だね」と、さっき感謝し褒めたせいで、この若いナースは後に退けないのかも知れない。

「一ノ瀬さんは経験二年目ぐらいかな？そうでしょう、ちがう？」口許を固めに結んだ彼女の、すべっこい頬の光沢を眺め上げながら僕は気楽に尋ねる。

まだ薄化粧もしていない顔の、可愛らしい団子鼻の頭には汗疹のようなツブツブが見え

る。それが、澆瀨としたお年頃を窺わせ如何にも初々しい感じなのだ。

やや間を置いて彼女が、「……シート、ま、そんなもんですかね？」と僕の質問に答えたのは、彼女自身に言い聞かすような口調でもあった。

その目は、相変わらず肘から手首までを追い、血管を探すのに夢中し、一所懸命に点滴をセットしようとする熱意が伝わってくるが、その癖おっとりしている感じだ。

「ちょっと痛いですよ」と一言、前もって断り、肘の裏側の柔らかな膨らみに刺した。

チクツという痛みもない丁寧な針のタッチが、如何にも素直な彼女らしかった。だが、チューブの仮留めまでを終えた頃、針側へ少々流入するはずの血液が見えてこない。

すると彼女は、何故かちょっと待ちもせず、そこで針を抜いてしまい、腕の針孔痕にアルコール綿を薄いテープで押し当てると、「ちょっと、このままで居てください」と言い残すや、何か急な用事を思い出したのか駆けるようにして病室を出ていった。

すると、すぐに彼女と入れ替わりの如く、ほとんど目の笑っていない三十代で化粧の濃いベテラン美人ナースが入って来た。黙ったまま僕の右腕を取り、一瞬のためらいも無く腕の背側に新しい点滴針を刺し、テープ留めのセットまで終える。何とも素早いが、ごく事務的な表情なので、僕の中から自然に感謝の念が湧き起こらないのが不思議だ。

個々の患者にとって、看護テクニックの上下のみでナースの値打ちが決まる訳ではないようだ。この時の僕は、いつも生真面目な一ノ瀬ナースが、ちょうど廊下を通り合わせた先輩ナースに、暫定処置の残りを頼んだと思うばかりだ。

「ちょっと早めに落としておくわね」と不笑の美人ナースは言い、点滴落下の調節弁コマの位置を下方へずらした。そのコマを下へずらせば、点滴チューブがコマの圧迫から解放されるから、薬液の滴り頻度が途端にポタポタポタッと早い感じに変わる。

「痛いようだったら、此处を自分で調節して。やり方わかるんでしょ？」

冷徹さ以外の表情を浮かべぬ不笑ナースの目へ、僕は真下から頷く。一日中ベッドに仰向いている身は、一刻も早く点滴が終わり針を外してもらえば、夕食や夜間に眠る時など、ジワジワ来る鈍痛と痺れから解放され、その後の晴れがましさが実に心地好い。

が、ナースによっては、患者がこの調節弁に触るのを極端に厭がる事も僕は知っている。滴下を速くしすぎると、皮下組織に洩れ出るか、心臓がドキッドキッと脈打つ圧迫感が生じるからだ。まちがいなく点滴落下の適正化は、病室に来るナースが絶対権を握っている。

常に腕に填めるか、又は手に持った時計の秒針と刻々突き合わせ、慎重に点滴のしたたり速度を数えて、可動調節コマの位置を決めてゆくのは若いナースに多いと傾向的に言える。多分、看護学校で習った基本動作になお忠実に沿っているのだろう。

で、三十分ほどして、僕の左隣りの藤木さんが夜通しやっていた容量八百CCの点滴が終わり、ブザーの呼び出しで新品と交換しに来た小谷野ナースが、彼への滴下量を基本通りに腕時計で確認した。その戻りぎわに、ふと彼女が僕の点滴落下速を横目で見た。

「あれまあ！」

彼女特有のガラッパチなしゃがれ声が飛び出て、僕の方を睨む。

「困った人だね。この人はふんとに、も一お」口癖で「本当に」が、「ふんとに」に聞こえた。

その身体ぜんたいで口惜しがって見せながら、今時の若い女らしく、いやにすんなりと長細く伸びた脛で、前方を踏んづける如きシャカシャカ歩きでこちらへ逸れて来る。すぐ

さま滴下数を、顰めた目でじっと数え、早過ぎる速度をかなり遅くし直した。つまりポタッ、ポタッと眠くなる程にスローモーな感じにまで絞ったのだ。

「いい？今度から絶対にここをいじくっちゃ駄目だからね」

小谷野ナースは吊り上げた目を半白眼に細め、両手を腰に当て、僕を見下ろす。強いその剣幕に、僕は毛布を首許まで引き上げ、若い彼女へこっくりうなずいた。

「言っておくけど、これは、看護婦が測って決めるものなんだからね」と、念を押す小谷野ナースはまだ、昂った気持ちが収まらない様子だ。

「患者さんの身体が、無理なくお薬を吸収できるようにするの。言ってみりゃさ、これは看護婦の商売道具なんだ。患者さんが勝手にいじくっちゃ駄目さ。ベッドで一日中退屈なことは分かっているよ。でも、少しぐらい速くしたって面白いことなんて、何も無つかんべにさ」

と、言い切る語尾を、声高な上州弁まるだしの尻上がりにした。

その上、小谷野ナースは口惜しがり屋なのか、持って生まれた性格が元気すぎるのか、まるで揺らぐリズムに自ずとスイングするミュージカル女優みたいに両拳を握って肩を競り上げる、派手な貧乏揺すりみたいなジェスチャーまで付け足すのだった。

だが、ポッと上気したその顔は怒っている。せっかく肌色のファウンデーションで薄化粧している美容が台無しである。当人は、女性としては汗っかきの方だから。

確か彼女は年齢が二十三か四のはずだ。三年前も此の四階病棟に居た。が、三年前は、上自蓋に青い微かなアイシャドウを施してなかったし、今みたいに水に濡れたての如き流行のざんばら髪スタイルでもなく、頭髪を薄茶色に脱色してもいなかった。

三年前の前回、既に初夏の五月下旬にやはり胃潰瘍で僕はここへ入院した。その頃この娘は、当市の看護学校を出てまだ二カ月目、極めて日の浅い新米ナースだった。むろん彼女は、十日弱しかいなかった軽症患者の僕のことなど覚えてはいまい。

それはこの間、懐かしいある件を、彼女に尋ねてみて僕には分かっている。そして、それを尋ねたことでこの小谷野ナースが、僕を妙な患者と誤解した面がある。

あの時彼女は、「え、三年前？」とやや用心深い顔をして、「ふーん、三年前ならアチシがここに入った頃だな。でも、お宅さんそれが何かア？」

ガラッパで強気そうな顔を、小さく揺すぶりながら僕の質問にこう答えた。

「悪いけど、アチシ、お宅さんの入院した時の様子、覚えてないけどな」

「そりゃそうだよ」と僕は言った。「次々に入れ代わる外科棟の患者を一々覚えているはずないもの」と断って、「違うんだ。僕が聞きたいのはね、もう此処を退職されたそうだけど、あの頃いたベテランの加藤さんの住所とか分からないかな？」と尋ねてみた。

この娘が、あの加藤ナースを忘れるはずがない、とその時僕は思っている。

「あ、加藤さんのことか」と小谷野ナースは頷き、「それはアチシの大先生だ。懐かしい名だな。フーン、お宅さんも知っているんだ。そうだよ、記憶に残る人だったもんね。あの人の手は神業だったもの。すごく厳しい人だったけど、アチシはいろいろなことを教わったからな。ーと、住んでいるのはこの市内のはずだ。けど、住所までは知らないな。でもお宅さんそんなことを聞いてどうすんの？」

しつこい変質者が多い世の中だ、とその目が上瞼の歪みで示していた。

僕はたまじめで尋ね直す。「いや、入院中にいろいろお世話になったから暑中見舞いでも書こうかと思って。誰か、加藤さんの住所を控えてないかな？」

「婦長さんが知っているかなア？」と傾げた首で小谷野ナースは、最後に呟き声でそういったのだが、後で婦長に尋ねてくれたものかどうか一切何の返答もくれないばかりか、その件はあれきりで、病室へ入ってくる折も素知らぬ顔をしている。

彼女はもの忘れをする方じゃない。それは、現に同室の患者で肝機能障害のある人から肝臓にいい退院後の食事の摂り方を問われ、あとで看護教本を持ってきて説明して居る。その知識程度は、若い女性にしては等と安易に決めつけてはいけませんが、彼女の本質が見かけほどのガラッ人ではない、しっかりした頭脳の持ち主だと悟らせてくれた。

それに、もし彼女が不親切者なら、わざわざ患者に回答を準備して来て、「今ので分かんなかったら、また後でなんでも聞いちくれる？アチシの知っている範囲でしか答えられないけどさ」など、恥じらい気味の上気顔で言い置くことも出来まい。

ベテラン加藤ナースの件は、僕の尋ね方が悪く、変に回りくどかったのだろう。

今、若い三年後の小谷野ナースは、加藤ナースが居たらきっとそうしただろう様な手厳しい調子で僕の不正行為を叱り終わると、病室を足早に出てゆきかけた。

「そんだ、コヤノさんさ」

と、僕の左隣りから藤木さんが秋田は角館訛りでのんびり、そう呼びとめた。

そのゆったりした声音に誘われるみたいに彼女は小走りに戻ってきた。藤木さんは胃癌患者である。現在は、縮癌剤を投与されながら患部の除去手術を待っている身だ。

「一ノ瀬さんという子だっけ、あの看護婦さん三年目ぐらいになるんだろ？けさ聞いても、彼女はつきり言わないんだよ。なア」と、隣の僕に向き直り、同意を求めてくる。

すると小谷野ナースが、つま先を内股気味にして背筋をまっすぐ立て、ゴクッと唾を飲んだ。その様子を見て、ふと思い出した。彼女が、年下の一ノ瀬ナースへ、面倒見のいい先輩らしく何かとカバーする際に、的確に短く助言する姿がままあるのを。

だが僕はのんびり応じた。「いや、やっと二年目でしょ、あの点滴の入れ具合では？」

一瞬の間があり、小谷野ナースの目が、隣り合うベッド上のノーテンキな男二人をにらめつける。彼女は、この二人が陽の暖かな午後などは点滴管の付いたままベッドにだらしなく身を崩し、ナースにそれぞれニックネームを付けて駄弁るのを知っている。時には点滴壺が空になったのも気づかず、馬鹿っ話に夢中している五十路の中年男二人を。

一般的にだが病室で、同僚の年若いナースについて質問された場合は、それ以前に必ず男性患者同士の口に、興味半分の下世話な話題が上っているものだ。今小谷野ナースの放った目線は、それを解っている上での恐い光り方だった。

「アチシの経験から言わせてもらいますとゥ」と、小谷野ナースがやや声を低く震わせながら言った。「いや、ぶっちゃけた話だけどね。点滴針を刺す方の身になってご覧よ」

顎先を引き、二人から顔を逸らすまいとして上目遣いになった様子は真剣そのものだ。

「コトバが悪かったらごめんよ。看護婦になった最初の年って、そういう質問を患者さんから面白半分に聞かれるのって、すごく嫌なんだよネ。看護婦だって学校卒業して何もかも最初の経験だからさ、自信が無いんだよ。それを、看護婦何年目なんて患者さんに訊かれてサ、厭だよネ。だって、患者さんは、他人のデリカシーって分かんないのかな。も

し自分が不馴れな立場に居たらって、少しくらいは想像がつかないのかな！」

小谷野ナースは、もうこうなったら言い切ってしまうぞという勢いだった。

「患者さんから一日でも早く信頼されたいっていうのが看護婦になったばかりの思いじゃないか。看護学校で勉強する間だって看護実習の時だって、アタシ達ってホントはそればかりが気になっている。怖じけていてさ、アタシって本当は看護の仕事に向いてないんじゃないかなって悩んだり、後悔したりして、内心はびびってんの」

彼女は再び厳しい目線で睨み、こちらを突き刺した。

「今でも、そうかなア？何年目なんて訊かれると、患者さんが腹の中でこの看護婦は駄目だなんて言っているようで、いちばん気持ちが揺れる時なんだ。それが顔に出てしまうのかな？先輩の立派な看護婦さんから、ガンバッテネって、今でもアチシ毎日言われている。看護婦になってもう三年経つのに情けないよね。だから、お願いだから、もう、何年目かななんてことは一年目のあの子に聞かないでよ、いいね？勤めて何か月目かも、きっと、おたくさんには多分判るんでしょ？」

彼女は、仲の良い後輩一ノ瀬ナースのためにはっきりこれだけのことを言った。

そうか、一ノ瀬ナースがこの四月の新入りなら十二月の今はまだ経験九ヶ月未満だ。あの時、彼女は何か他に急用があって僕から点滴針を抜いたんじゃないなかったんだ。自身の未熟さを弁えて居て、他の助けを求めに走っていったのだ。

突然、この三年間における小谷野ナースの成長ぶりが僕にはよく解った。

だが事情を何も知らない隣の藤木さんは少し、いや、かなり今の彼女の言い方に驚いたようだった。プレス会社の地方工場長を務めるような腹の据わった人だが、無駄に小谷野ナースを誤解させても詰まらぬ為、僕は大きくこの場に言い足さねばならない。

僕は早口でこう言った。「三年前、五月にここへ入院した時、まだ学校卒業一ヶ月目でホヤホヤの新米看護婦さんが一人いた」と二人の方を交互に見ながら。

「ある朝、張った腰まわりがビヤ樽なみにでかいベテランの加藤ナースが、その新米を連れて相部屋に入ってきた。でもその時は、まだその娘が新人ナースだってこと知らなかったけどね。その時の部屋はナース・ステーションの一つ隣り 413 号室。ここと同じ定員六人の相部屋だ」

小谷野ナースは何を言い出すのかという顔付きで、こちらを見ている。

「大ベテランの加藤さんは、その娘を傍に寄らせてから、先ず二人の患者の腕に実地の模範となる点滴挿入をして見せた。それから、残りの僕ともう一人、下半身が全く不随だったけど、とても元気な六十代の人々のベッドの間にその娘を呼んだ。加藤さんは僕の腕を取って、点滴針を刺す手順を、始めからもう一度その娘の前でして見せた。「ザ点滴」と言えるほど完璧な模範演技だった。それから加藤さんは、ひきつったみたいに目を見開いている連れの娘に、さア今の通りやってごらんさいと命じた。で、今度はその娘の本番だ。コクンと頷いたけれどその娘は、見るからにコチコチに震え上がっている。だいいち僕の腕を取って点滴針を近付けたけど、その手の先がワナワナ震えている」

小谷野ナースは何を思い出してか、目が不安気にキョトキョト左右に動いた。

「加藤さんは脇から、どうしたんです？アナタ、ためらわず早くおやりなさいって言うし。娘はエイッて刺そうとするんだけど、浅い呼吸で以てだんだん針先の震えが大きくなる。

その顔を見たら、ゴクッと唾を飲んだ娘は汗をたらたら流していた」

恐いようなその表情を、今も僕はよく覚えて居る。切羽詰まったその感じ。

「目も震えていたけど、手も震えている。僕が思わず、『タイム!』って叫んだら、その娘はヘナヘナって感じの腰砕けで以て、後退りしたっけ」

小谷野ナースが、今話を注意深く聞いているのが分かった。口を「への字」に結び、細長い両腕を互いの肘がくつつく程に絞り、前に垂らしている。

仰向けに寝て天井に点滴瓶を見上げるまま、僕はあとを続けた。

「ベテラン加藤さんは、娘を叱った。それから、もう一度僕の腕を使ってその娘に完璧な点滴見本を演技してみせた。そして又、さァ、アナタ、やったんさいと言った。でもね、もうちょいまでは行ったけど、その娘がさっきと同じ腰砕けになった。こりゃ、どう見ても処女だ。僕は加藤さんに文句を言った。『加藤さん、もしかしてこの子、これが初めての体験で僕が実験台じゃないの?』ってね。すると加藤さんが鼻でフンと笑ってね、『あなた、そういう幸運があってもいいんじゃない?』って眉に白髪がある横目づかいでニタリ見られたよ。その時、僕の隣のベッドから下半身が昔の事故で全く不随の人が、僕に呼びかけて、こう言った。『おい、君は今いい経験を積もうとしている。看護婦さんは我々病人を救ってくれるな。だったら病人には、若い看護婦さんを育てるという義務がある。ひとつ我々の身体を今日からこの娘さんの教育に貸そうじゃないか? どうだね』って僕に訊いた訳」

すると、そこで藤木さんが、「ほーう、OJT（^{オン・ジョブ・トレーニング}職場内訓練）か、そりゃ現場・現実・現物で

好いな」と株式会社の工場長らしい好意的な響きを挟んだ。

僕はどんどん話の先を続けた。「なにせ隣の老人はとて地声が大きい。そうしたらその新米娘が喜んだ。途端に顔色が火照って生き活きしてきた。ついにその新米は僕ら二人の腕へ加藤さんの教えた通り、でもいやにゆっくり点滴針を刺した。終わったら、きっと元々が明るい娘だから、こう挨拶された。『アチシあさってもこの部屋の点滴当番になります、よろしくお願ひしまーす』ってニコニコ顔を下げて言われた。あの時の、バカ丁寧で下手くそな点滴は痛かった。今でもあの痛みを思い出せる。でも僕は、加藤さんが指導したあの新米のおかげで、あの時から少々下手な注射も平気になったけどネ。うん、確かに小谷野さんの言う通りだ。一年目と分かった看護婦さんに、患者があまり気持ちの負担をかけちゃいけない。なにせ患者は、実地で若い看護婦さんを育てなくちゃね?」

僕は、ポタッ、ポタッと垂れる僕の点滴よりもずっと速く話した。

そこで視線を下げたら、僕のベッド裾側の一ト所で小谷野ナースが腕を振り、駆け足の格好で音のしない地団駄を踏んでいる。何の真似か知らぬが、つま先を極端な内股にして、女らしいサイズの小さめな靴をパタパタと踏み替えずに居られぬらしいのだ。

「ね、その六十代の足の利かない人って」小谷野ナースが言う。「名前は、出井さんと言わなかった? 同じ部屋に小泉さんという人が居なかった?」

目を大きく見開いた彼女は、浅く早い息が、胸許で喘ぐように弾んでいる。

あれ今、思いがけなく小谷野ナースの口から懐かしい名前が二つ出てきた? 出井老、そして小泉老って人のことを、今でも僕は良く覚えているのだ。

「うん、小泉さんも一緒の部屋だった」と僕は答えて、「小泉さんは軽い脳梗塞だった。お二人とも歩けない。部屋入り口の左右にいた。あの部屋は年中カーテンが開けっ放しでさ。

付き添いの夫人達がすごく剽軽で元気なパチンコ好きで、面白い相部屋だったよ」

すると、今時育ちのひよろ長い小谷野ナースは、不格好にユサユサと身を揺すった。左右に揺するその身が、なんだかひよろ長いモヤシの精みたいに見える。

「覚えている、アタシその人達を全部覚えている。だってアタシが看護婦になって初めて担当した部屋だったもの。でも、出井さんという人は、新米看護婦のことをそんな風に思ってくれる患者さんだったんだ。それを、アタシ忘れたのかな？何も知らなかったのかな？そんな人が、入院してくれていたんだ？患者さんて、そんな風に看護婦のことも考えてくれるんだ？でも、その人のくれた、大事な言葉を忘れてるなんて、アタシどうしようッ！」

彼女はおしまいを叫ぶように言い、そして不意に笑井へ喉許を反らした。

次いで、じっとして居られないのか一ト所を円く、ぐるぐる回り出した。小谷野ナースは顔を赤らめて、いま急に、その目から光る大粒の涙がポロポロこぼれ出した。

ハンケチを持って来ていないのか彼女は、指の甲で目の下を何度も横に拭う。この部屋から早々に出て行く選択肢もある事を、ド忘れしているみたいだった。

「わア、こまった。泣けちゃうよ。なんでアタシは泣けるんだ？ハハハ、何でも来いの看護婦なのにサ、やばいよ。笑いたいのに、ちっとも涙が止まらない」

そうだ、顔では笑みかけているのに一向に涙の粒が途切れない。長い脛で、じたばたとリノリウム床を踏み締める仕草の上に、若い顔色が興奮でポッと赤らみ、三年前のあの時のように輝っている。そこに、少しも見せかけの嫌みがないのだ。

この娘は、もしかして新しいタイプの美人なのかも知れない。アイシャドウのお化粧のせいじゃなく、内側から命の光線みたいなものが射している。僕と同年輩の藤木さんも隣から、彼女の泣きながらする足踏みダンスに見とれていた。

だが、やけくそ気味の笑いになった声を上げ、彼女は我々二人に言う。

「アタシ、患者さんがどんな気持ちでいるか、看護学校で習って知っているつもりだった。患者は皆、我まま者。何処かしら愚っている。だから許さなきゃいけない、そんなもんだよっていう扱いのつもりでアタシ、患者さんに接して来た。でも、今だから振り返れるけど、そういう訳にも行かないんだ。看護婦が、患者さんに腹を立てさせられる方がずっと多い。でも、そうやって患者さんの事が少しずつ分かってくるんだ。学校と此処の現実とは違うもんねッ。アタシ、出井さんのいつてくれた言葉、もう絶対に忘れない！」

今や谷点した笑みを、透き通るような若い肌の大きな口辺に拡げて小谷野ナースは、まだ手の甲で目の下を横に拭い、嬉しげに泣いている。この子は泣き虫なのだろうか？

以上